



いつか余裕が持てたらと夢見た'69年を若くして乗りこなす

カスタムの志向はさらに細分化の一途を辿るものの、本誌でフィーチャーするのはあくまでもアメリカ志向を幅広く紹介していきたいところ。多くは高年式のモダンなスタイルながらも、そのルーツを辿れば様々な発見、奥深さを実感できるのもカスタムカルチャーならではといえる。日本でも'80年代後半から脈々と受け継がれてきたアメリカのカスタムカルチャーによって、オーセンティックなスタイルから最新のモダンカスタムまで、あらゆるカスタムを自由に楽しめる環境が整っているのではないだろうか。

カスタムに触れば、実際に乗る乗らないは別としても、いつかは旧車にも乗ってみたいと思う人は少なくないだろう。この'69年カマロのオーナーもそんな一人だった。

普段から気楽に乗れる手軽なものはもちろんのこと、ビッグリム、ローライダー、レストモッドなど、入り口からさらにディープなスタイルまで、カスタムにどっぷりハマれる提案をしてくれる愛知県のGRACE CABが自社で製作したこのカマロは、内外装の多

くをアメリカで行い、細かい詰めは日本で仕上げたもの。グレーザーを基本にしたモダンなインテリアに加えて、普段から乗れる信頼性を両立させている。

エンジンは最新のインジェクションではなく、SBC350のキャブレター仕様。現行のチャレンジャーなどを乗り継いできたオーナーにとっても、レスポンスの高いキャブレター特有のフィーリングこそ求めているものだったようだ。

さらに各部はクロームパーツでドレスアップ、サブフレームやサスペンションなどはペイントではなくパウダーコートされ、綺麗に乗って楽しむ雰囲気に仕立てられた初代カマロ。エンジン、サスペンションなど、ルックスだけでなくキャラクターそのものをいくらかでも自分好みにカスタムできるのも、クラシックモデルの最大の魅力。20代にして早くもその夢を実現させようとしているオーナーは、今後さらに時間をかけて成熟させてくれることに期待したいところだ。

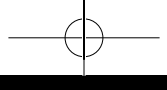
1969 CHEVROLET CAMARO

text & photographs by MASAHIRO HAYASHI
special thanks to GRACE CAB www.gracecab.jp 0568-35-7790
owner: TAKEHIRO MURAKAWA < AICHI >



After all,
We Love Camaro 世代を超えて愛されるカマロ





ホイールは程よく磨き揉まれたビレットの王道INTRO WHEELS Westcoast-XLRモデルの19×8インチを装着。タイヤはNANKAN Nobel SportのNS-20をセット。サスペンションは前後ともに社外コイルオーバーキットでマイルドなローダウン。普段使いにも全く気を使わない仕様となっている。



リーフスプリングにリジッドアックスルという、マルチリンクが普通となった現代にはないリアサスペンションの構造も味わい深い。それ以外に、特にアンダーキャリッジのコンディションが抜群ということがこの角度からでも確認できる。



とりわけ日本国内においてはストックコンディションが重宝されているものの、このカマロはアメリカにて徹底したカスタムが投入されている。スタイリングは当時のままで、そのほかはできるだけ現代のテクノロジーなどを投入するスタイルは、今もトレンドの先端スタイルだ。グレーの濃淡2色の配色でデザインされた上品なデザインと質感の高い素材で張り替えられたシート、ビレットのステアリングホイールなどによって、往年のホット・ロッドの雰囲気演出。ホワイトのAuto Meterも硬派なチョイス。足元を照らすLEDも全体の雰囲気を崩すことなくマッチさせている。



After all, 世代を超えて愛されるカマロ
We Love Camaro

1969 CHEVROLET CAMARO

ボンネットとトランクフードにデザインされたレーシングストライプでアピールする外観だが、そこからさりげなく見えるリアトレイの6×9のスピーカーにも注目したいところ。マッスル系以外にも含めて、やはりカスタムの基本としてサウンドシステムは欠かせないアイテムのひとつ。



オーナーの村川さんは実はこれまでに最新のチャレンジャーやローライダーのインバラといった複数台のアメリカ車を所有してきており、様々な車の魅力に触れてきて、いつかは乗ってみたいと思っていた。69年のカマロを弱冠23歳の若さで手にしたツワモノ。



エンジンはサイドボルトのSBC350に換装され、クロームのエアクリーナー、バルブカバー、セラミックコートヘッドスなどで適度にドレスアップ。フレイムオフ後にパウダーコートされたアンダーキャリッジ、ブレーキ、冷却系統など、安心して乗れるようにモディファイ。キャブレターのフィーリングを楽しみつつ、コンディションは極上という意味、非常に贅沢な仕様。

